

シェイクスピア翻案映画としての

『果てしなきスカーレット』

佐々木隆

プロローグ

シェイクスピア映画は原作に映画監督や脚本家が手を加えながらも大枠を変更せずに製作されるものや、時代設定等背景となるものの大きく変更しながらも原作の意図を生かすものや、エッセンスだけを生かし全く新しい作品として製作されるものがある。

細田守監督『果てしなきスカーレット』（二〇二五）はパンフレットの中で『ハムレット』の翻案（一）であることを明言し、むしろ「アダプテーション（翻案）するか」（二）と細田守自身が述べている。一般には細田アニメの観点から『竜とそばかすの姫』（二〇二二）以後の新しい作品であること、女優・芦田愛菜

が初めて主演を務める映画として注目を浴びた。ここではシェイクスピア翻案映画としての『果てしなきスカーレット』（以降『スカーレット』と略す。なお、人物を指す場合にはカッコを外してスカーレットと表記する）について見ておきたい。

一 『ハムレット』から『スカーレット』へ…登場人物

翻案では原作のテーマが生かされているかどうかは非常に重要な点である。この点では『ハムレット』も『スカーレット』も大きなテーマとして「復讐」がある。実際には死んではないが、スカーレットは冒頭早々で「憎き仇への復讐に失敗して、死んだ」（三）という思いを口にする。舞台設定もデンマーク、エルシノア城が描写され、アムレット、ガートルード、ギルデンスターン、ローゼンクランツ、

ポローニアス、レアティーズ、コーネリウス、ヴォルティマンドと『ハムレット』の登場人物がそのまま登場する。アムレットは十二世紀に歴史家サクソ・グラマティクスによって書かれた『ハムレット』の原作とも言えるデンマークの歴史に関する『デンマーク人の事績』に登場するアムレート(Amleth)はハムレット王子のことで、この時のアムレートの父の名前はホルウエンデイルであるが、このあたりだけが名前としては一致しない。しかし、細田が『ハムレット』だけではなく、『ハムレット』の原作にも目を向けていたことは抑えておきたい。

登場人物だけを見れば『スカーレット』ではオフイーリア、ホレイシヨは登場しない。その代わりに看護師の聖(High)が登場する。ハムレット王子が王女のスカーレットになっていること以上に、聖をどう捉えるかがこの作品の最も鍵になると思える。設定では聖は看護師という設定である。聖が

オフィーリアとホレイシヨの役割を果たすのかどうかは、ここでは「否」としておきたい。なぜなら、短い時間の中でスカーレットと聖は生死を共有したことで精神的にかなり近い関係にはなったものの恋人同士にはなっていない。また、ホレイシヨはハムレットに寄り添いながらも実際に外部の存在である。聖も異世界からの人物であること、死者の国ではスカーレットと共に行動しているが、スカーレットが闘いに身を投じているのに対して、聖は死者を出さないように常に行動している。

二 翻案のポイントはどこか

筆者は『果たしなきスカーレット』を見終わった時、シェイクスピア翻案映画として捉えた場合にポイントになるのは次の五点ではないかと考えた。

一 「復讐」がテーマとなっていること。この点は共通している。この背後に「許し」がキーワードになっていること。

二 ハムレット王子がスカーレット王女となり、オフィーリアが登場しないこと。

三 聖という現代からの人間を登場させたことをどうとらえるか。ホレイシヨの役割を一部担っているものの、細田が全く新しく着想した人物であること。

四 「死者の国」を設定したこと、さらにはこれが意識を失った時の異世界的な役割を果たしていること。原作には全くない設定であること。

五 スカーレットは最後には死なず、王女として国をまとめていくことで終わること。

筆者が今後考察を行いたいのは第一に「三 聖」という現代からの人間を登場させたことをどうとらえ

るか。ホレイシヨの役割を一部担っているものの、細田が全く新しく着想した人物であること」と第四の「死者の国」をどうとらえるかだ。特にこの二つの点を大きく取り上げた考察を今後も行っていきたい。

エピソード

『スカーレット』では毒によって意識がなくなつた状態が「死者の国」として描かれた世界から、意識を取り戻すことで現実に戻るという設定になっている。これはイギリスのファンタジーの先駆的な作品、ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』（一八六五）、アメリカのファンタジーの先駆的な作品、フランク・バウム『オズの魔法使い』（一九〇〇）と類似の設定である。さらに、こうした夢の世界はシェイクスピア自身も『じやじゃ馬ならし』の序で

スライが酔っ払った間に見た夢のような設定にな
っていることに似ている。

枠組みを作り、全体の内容が夢、あるいは眠って
いる間の幻想の世界として描いたことは、フアンタ
ジーの原点ともいう手法になっているが、問題はは
やり聖の存在であろうか。全く別の時代の異世界か
らの人物が「死者の国」に登場するというこの設定
はシェイクスピアにはない手法だ。「復讐」と「竣
巡」を繰り返す点は類似するものの、死なないハム
レットになっている点は決定的に異なる。これは加
藤泰監督『炎の城』（一九六〇）と同様だ。この作
品は『ハムレット』の翻案映画であるが、ほとんど
取り上げられることはない。まとまって論じたのは
おそらく筆者が最初であつただろう^(四)。

『果てしなきスカーレット』は細田の思いがかな
り反映された新時代のシェイクスピア翻案映画の
一つとして捉えてもよいだろう。しかし、その評価

を今下すことは控えておきたい。今回は整理するこ
とにとどめておきたい。

注

(一) 細田守「1万字インタビュー 原作・脚
本・監督細田守 争いの絶えない今の世界だ
からこそ、「復讐」をテーマにしようと思
いました」(プログラム『果てしなきスカーレ
ット』東宝株式会社ライツ事業部、二〇二五
年十一月)、頁表記なし。

(二) 同書。

(三) 細田守『果てしなきスカーレット』(新
潮社、二〇二五年七月)、十二頁。映画の原
作小説となっているため、台詞等はこの原作
小説より引用する。

(四) 「日本におけるシェイクスピア映画研究

に關する一考察―『炎の城』を巡って』（『武蔵野学院大学大学院研究紀要』第八輯、武蔵野学院大学、二〇一五年三月）、「シエイクスピア映画としての『炎の城』に關する研究―『ハムレット』とのストーリー展開の比較―」（『武蔵野学院大学大学院研究紀要』第九輯、武蔵野学院大学、二〇一六年三月）、「『炎の城』における劇中劇に關する研究」（『武蔵野学院大学大学院研究紀要』第十一輯、武蔵野学院大学、二〇一八年三月）。

※本稿は二〇二六年五月四日に一旦脱稿した。今後、海外上映もあるため、その後の反映なども参考にしながら、再度取り上げたい。